日本タバコ会社　　連載８

権藤のマンション

　珍しく、その週末、佐伯は、権藤から自宅に誘われた。いままで、社長室長として三年近く仕えてきたが、プライベートな誘いを受けたことはない。

　権藤は、渋谷にある二ＬＤＫのマンションにひとり住まいということであった。ＮＴＳ社長就任直前に妻に先立たれ、松涛にある自宅を引き払って、マンションに移ってきたという。一人娘は独立して、別居しているということだった。

　佐伯は、迷ったが、シャドネーの白ワインを手土産にした。権藤がワインを好きだと聞いていたからだ。しかし、自分が選んだものでは、権藤の口に合わないかもしれない。

　驚いたことに、権藤は料理が趣味らしい。今日は、手作りの料理をふるまってくれるという。マンションはセキュリティがしっかりしており、常駐の警備員に身分証明書の提出を求められた。約束の十二時には、五分ほどあるが、社長室長のくせで、時間前に部屋を訪れた。個人の家に訪問する時は、少し遅れるのが礼儀と聞いていたが、社長の権藤ならば、準備はとっくに整っているに違いない。

　ドアホンを押すと、権藤が玄関に現れた。いつもスーツにネクタイ姿しか見たことがなかったが、今日は実にラフな格好だ。ポロにジーパンである。佐伯は驚いた。

「社長、本日は、お招きいただきましてありがとうございます」

そういうと、手土産のワインを手渡した。

「佐伯君。今日は無礼講だ。あまり気を使わないでくれ」

そう言って、権藤は部屋の中に佐伯を招じ入れた。佐伯は、マンションの豪華さに目を奪われたが、リビングに通されて、もっと驚いた。大きな窓から、東京の街が眺望できる。佐伯は、いままで会社の狭い寮に住んできた。寮ならば賄いつきなので、独身の佐伯には便利である。社長室長がみっともないという声もあったが、寮は会社からも近い。多忙な社長の世話をする身には、ありがたいロケーションである。

「今日は、あとふたり来客がある。料理は、十二時十五分から出す予定だ。それまで、ビールでも飲んでいるか？」

権藤は、冷蔵庫を開けた。そこには、世界のビールや、ワインが並んでいる。佐伯は、コロナの瓶を選んだ。

　佐伯は、リビングの立派な椅子に座りながら、世の中には、こんな世界もあるのだと感心していた。佐伯の生家は、農家だった。米からタバコに転作したが、父とおじは、近くにあるタバコ工場で、農閑期には、アルバイトのようなことをして収入を得ていた。

　その時、玄関のチャイムが鳴った。権藤は

「佐伯君。悪いがかわりに出てくれるか。いま、料理の準備で手が離せないんだ」

佐伯がドアを開けると、女性が立っていた。向こうも驚いている。権藤は、台所の奥から

「佐伯君、娘の小枝子だ。小枝子。私が世話になっている社長室長の佐伯君だ。ちゃんと挨拶してくれ」
佐伯は慌てた。あまりにも小枝子がきれいだったからだ。佐伯は、一瞬、有名女優がやってきたのかと思ったくらいだ。
　小枝子は安心したように
「失礼しました。あなたが佐伯さんですか。父がいつもお世話になっています」
と丁寧な挨拶をした。佐伯は、自分が言うのもどうかと思ったが
「どうぞ、中にお入りください」
と小枝子を中に招じ入れた。それ以外の適当な言葉が浮かばなかったからだ。
「小枝子、もうすぐ食事をはじめるぞ。はやく手を洗って、うがいをしてこい」
「やーね。パパったら、いまだに子供扱いなんだから」
パパ！佐伯も驚いた。権藤にパパは似合わない。
「吉本君は少し遅れるそうだ」
「吉本おじさんか。何年ぶりかしら。会うのがとても楽しみ」
どうやら、もうひとりの客は、小枝子も旧知の仲らしい。
　佐伯は、権藤の料理の腕に驚いた。一流レストランのシェフも顔負けである。前に、引退したらオーナーシェフになると言っていたが、これなら、十分やっていける。小枝子も料理を堪能している。
「佐伯君。こいつは、料理目当てでしか、家に来てくれないんだ」
と権藤はこぼしている。
「何言ってるの、パパ。娘が来てくれるだけでも感謝しなきゃだめよ。
佐伯は、本当は逆じゃないかなと思ったが、黙っていた。
小枝子は、佐伯に話しかけた。
「こんなわがままな父のお世話は大変でしょ。本当にご苦労様です」
佐伯は返答に困った。権藤は、そんな小枝子を目を細めてみている。本当にかわいがっていることが良く分かる。
「でも、パパは佐伯さんのことを豆もやしと言っていたけど、こんなワンマンの下では、太れないわよね」
と話しかけてきた。どうやら、権藤は、佐伯のことを豆もやしと娘に形容しているらしい。確かに、佐伯は背が高いが、ひょろりと痩せている。小さい頃、喘息ぎみだったので太れないのだ。不思議と背だけは伸びて、一八〇センチを超えている。
「いえ、お嬢さん。そんなことはありません。昔からがりがりでしたから。社長のせいではありません」
と佐伯は言った。すると小枝子は笑って
「あらやだ。まじめにとったの。冗談よ。冗談」
と言っている。

「佐伯君。申し訳ない。一人娘なので、わがままに育ててしまった。だから、他人に遠慮というものがない」
「しかし、社長の料理の腕はプロはだしですね。これなら、本当に商売ができますよ」
と佐伯は正直に話した。
「そうか。佐伯君のお墨付きなら、引退後の仕事も決まったな、これで」
と豪快に笑った。
「ところで、佐伯君。小枝子はいまだに独身だ。若くみえるが、もう三十七歳になる」
「やだ。パパは何を言っているの。まさか、これってお見合いじゃないでしょうね」
佐伯は思わず、ワインを噴き出した。
「だったらどうする？」
　権藤はまじめな顔をしている。佐伯は、まさかそんなことはないだろうとあせった。自分と小枝子ではあまりにもつりあいが取れない。佐伯が深刻な顔になると、権藤親子は大笑いした。
「佐伯さんって、本当にからかいがあるわ。いちいち、まともに反応するんですもの」
なんだ。からかわれていたのか。それにしても権藤が人が悪い。しかし、この親子は本当に仲がいい。佐伯はうらやましくなった。
「でも、パパが連れてくるお見合い相手って、いつもダサいわよね」
「何を言っている」
「だって、官僚だったり、政治家の息子だったり、政略結婚がみえみえじゃない。その点、佐伯さんは、はじめてのケースよね」
と話が戻った。佐伯は、もうだまされないぞと身構えた。
「だけど、佐伯さんって、どうしてその歳まで独身だったの」
と、小枝子は聞いてきた。権藤は
「おい、小枝子、失礼だぞ」
とたしなめた。
「いや、なんとなくというか。縁がなかったというか」
「本当？だって、佐伯さんって背も高いし、見た目はそんなに悪くないじゃない。まわりの女の子が放っておかなかったでしょう。ああ、もしかして、ホモじゃないの？」
と聞いてきた。佐伯はふたたびワインを噴き出した。
「ホモなんてことは絶対ありません」
佐伯は、必死になって否定した。ものすごい誤解である。すると、小枝子は再び大笑いした。
「ほら、やっぱりひっかかった」
と笑っている。この親子は自分をこけにして遊んでいるのだろうか。
そこに、玄関のチャイムが鳴った。
「あれ、きっと吉本のおじさんよ。私が出る」

そう言って、小枝子は玄関に走っていった。吉本は、頭が禿げていた。もう六十近くであろうか。
「いや、権藤先輩、すっかりご無沙汰しております」
「吉本君も元気で何よりだ。こちらは、わが社の社長室長の佐伯君だ。佐伯君。こちらは、財産省官房長の吉本君だ」
佐伯は、思わず直立不動になった。現役の高級官僚だ。とても佐伯が対等に会える人間ではない。
「佐伯です。よろしくお願いします」
思わず、声が裏返った。すると、小枝子は
「もう、そんなかたぐるしい挨拶はそれくらいにして、食べましょう」
と三人を促した。吉本は
「先輩の料理を堪能できるなんて、久しぶりですね」
と素直に喜んでいる。
「それにしても、さーちゃんは相変わらずきれいだね。十年ぶりかな」
「そうね。吉本のおじさんが、あの偏屈な官僚をお見合いで紹介してくれてからだから。そうね、十年ぶりかな」
どうやら、小枝子のことをさーちゃんと呼ぶらしい。
権藤は恐縮して吉本に言った。
「あの時は、吉本君には本当に迷惑をかけた」
「いや、いいんですよ。さーちゃんが気に入らないのでは仕方がありません」
「だって、吉本のおじさん。センスがなさすぎよ。いかにも融通がきかない堅物でしょう。それに、わたしはパパのことを見ているから官僚とは結婚したくないの」
と、小枝子は言っている。
「まあ、確かに堅物でしたな。仕事のことしか考えていない。しかし、そのおかげで、将来の次官候補と言われていますよ。いまでは、与党の大物のお嬢さんと結婚しております。場合によっては、選挙に出るかもしれません」
「佐伯さん。官僚って本当につまらないのよ。いつも午前様でしょ。しかも、たまの休みはゴルフに行ってしまうの。あれでは、プライベートがないも等しいわ」
と、小枝子は権藤を責めた。
「サーちゃん、ところで、大学の方はいかがです。この前、教授に昇進したとお聞きしましたが」
「教授！小枝子はいったい何者なんだ」
佐伯は驚いた。
「ああ、あれは、定期昇進みたいなものよ。うちの大学は助教授になって六年たてば、自動的に教授になるみたい」
と平然としている。

「佐伯君。実は、小枝子は都内にある私立大学で教鞭をとっています。私に反発したのか、理論物理学などというわけの分からない学問を専攻しています」
「なによ、それ。物理学には解はひとつしかないのよ。政治の世界の方がよほど訳が分からないわ」
佐伯はおそるおそる聞いてみた。
「あのー。お嬢さんは、どんな研究をされているのですか？」
「いやだ。佐伯さん。お嬢さんなんて。それに、そう呼ばれる歳じゃないわ。小枝子って呼んでよ。私の研究テーマは量子力学よ」
佐伯は、工学部を卒業している。確かに、量子力学を受講したこともあるが、最初の数ページで挫折した記憶がある。
　それから四人は料理を堪能しながら、いろいろな話をした。小枝子の存在もあったが、佐伯は久しぶりに楽しいひとときを過ごした。吉本は、権藤のかつての部下で、よく休日に、権藤の家に招かれたという。小枝子は、休みというと、父が仲間とゴルフにでかけるのが面白くなかった。そこで、権藤は一計を案じて、後輩を自宅に招くようになったのだという。
「権藤先輩のもとには、若手が自主的に集まって教えを請うという会ができました。いつしか、その会は権藤スクールと呼ばれるようになったのです。いまの事務次官の山城も権藤スクールの出身です」
佐伯は感心した。やはり権藤は只者ではなかったのだ。
　ふと気づくと、時計は夜の八時を回っていた。佐伯は驚いた。楽しい会となると、時間はあっという間にたってしまう。今日は、少しワインを飲みすぎたようだ。佐伯は
「あの、すいません。今日は、飲みすぎたようです。後片付けの手伝いはよろしいですか」
すると、小枝子は
「佐伯さんって律儀なのね。明日の講義は午後からだから、今日は、ここに、私が泊まっていくことになっているの。後片付けも父とふたりでやるから大丈夫よ。あとのことは、心配しないで」
　佐伯は、食事の礼を言って、権藤のマンションを後にした。自分の知らない別世界を経験した。しかし、これも今日で最後だろう。明日からはもとの生活に戻るのだ。佐伯は自分に言い聞かせた。そして、なぜか、小枝子の笑顔が浮かんだ。

戦略会議

　佐伯と品川は、週に一回は、権藤と打ち合わせをした。権藤は、多くの役員の退任の合意をとりつけていた。株主総会は半年先の六月二十九日である。この日までに、新しい執行部体制を固め、基本方針も打ち出さなければならない。ＮＴＳ再生のためには、「タバコは無害で、嗜好品」という立場から、「タバコは、ある程度有害である」という一大転換を

しなければならない。しかし、これは厳しい選択であった。下手をすると、この転換を契機に、禁煙支持団体からの非難にさらされるであろう。
　品川は提案した。
「やはり、有害であるという断定表現ではなく、吸いすぎは有害であるというような表現の方が無難ではないでしょうか。いきなり、一八〇度転換するということは、公器である民間企業として問題があるような気がします」
　権藤も、迷っているようだ。確かに、会社の内規として、タバコが有害というのは認めるのはいいが、それを表に出すと問題になるかもしれない。
「ところで、佐伯君。分煙化の方はどうなっている」
「はい、新しいビルや公共施設では、かなり浸透してきていると思われます。しかし、中には、金を節約するために、分煙とは名ばかりの施設も数多く見受けられます」
「そうだろうな。その言い訳はいつも同じだ。いっそのこと、全面禁煙にしてしまえば、余計な設備投資をせずに済む」
「そう言われるとＮＴＳとしては、何も言えません」
「ところで、路上禁煙地区はどうなっている」
「こちらも、あまり進展はありません。わが社が、つくった喫煙ブースで喫煙するひとも多いですが、なにしろ数が少ないうえ、設備も完備されていません。喫煙者、非喫煙者双方から苦情が出ています」
「そうか、対策には少し時間がかかるだろう。仕方がない」
すると品川が言った。
「やはり、わが社が大幅な増産を考えた場合、活路は東南アジアかと思います」
　実は、発展途上国では、まだまだ喫煙の害に対する意識が低い。特に、東南アジアでは、急激にタバコの消費量が増えている。ただし、タイだけは例外で、パッケージにタバコで病気になった写真を載せなければならない。映画スターの喫煙を禁じられている。
　しかし、当然、この地区は、ＮＴＳだけでなく、世界各国のタバコ会社が市場獲得のために、活発な運動をしている。政府与党への献金や、道路設備、建造物への補助など、ＮＴＳとしてもかなり努力を惜しまないできたが、やはり、アメリカやヨーロッパは政府が応援している。
　これら先進国の戦略ははっきりしている。タバコによる収入は減らしたくないということだ。税収がバカにならないからである。かと言って、自国のタバコ消費量は増やしたくない。とすれば、国策として、輸出を積極的に進めるしかないのである。
　もちろん、中国も一大市場ではある。なんと、全世界の喫煙者の三人に一人が中国人である。しかし、中国では、国内タバコ産業が急激に育っている。しかも、中国は、もともとコピー大国である。マイルドエイトや、ローライトなどＮＴＳの主力製品とまったく同じパッケージで粗悪品が大量に出回っている。魅力ある市場ではあるが、それだけ競争が厳しい。

「しかし、安定な収入を確保するためには、国内消費も確保する必要がある」
と権藤は言った。
　実は、日本政府の外交での弱腰のせいでＮＴＳは大きな損害を被った。かつては高かったタバコの関税を、自由貿易の名の下に、ほとんどゼロにしてしまったからである。この結果、大量の外国産タバコが日本市場に参入した。ＮＴＳは、日本市場においても外国企業と競わなければならないのだ。
「幸い、タバコの消費量は順調に伸びています」
「それは、女性や、十代の消費が伸びているということを反映しているのだったね」
「ええ、ただし、未成年の喫煙に対しては、かなり厳しい見通しといわざるを得ません」
「そうか」
「まず、多くの小中高で、敷地内の全面禁煙が実施されつつあります。まだ、六割程度ですが、近い将来に、ほぼ全校で実施されるでしょう」
「とすると、ターゲットとしては、学校に通っていない未成年や不良ですね」
と佐伯は言った。
「それでは、弱みにつけこむようでいい気はしないが、それもしようがない」
権藤も納得した。
「ところで、大学はどうなっている？」
「ええ、幸い、大学ではそれほど禁煙化は進んでいません」
「まあ、三年生以上は成人だ。法律的には、喫煙も問題ない。大学としても、そこまでは規制できないということだろう」
「それが、そう楽観視することもできなくなっています。キャンパスを新設する大学は、ほとんどのところが全面禁煙としています」
「そう言えば、小枝子も言っていたな。喫煙者は大学の先生をしている資格がないって。父親が、タバコ会社の社長というのに、遠慮がないやつだ。まあ、あいつもアメリカが長かったから、喫煙に対して厳しいのはしょうがないが」
　佐伯は、小枝子という名前を聞いて、何か心がうずいた。いったい自分はどうしたんだ。彼女は高嶺の花だ。それに、喫煙に対して、それだけ厳しい意見を持っているとしたら、タバコ会社に勤めている自分など、相手にしてもらえないだろう。
「佐伯君。この前、シンクタンクに依頼していた分析結果はどうなった」
「はい、もうすでにいただいています」
佐伯は、品川と権藤に資料を渡した。
「やはり厳しい結果だな」
資料によると成人男性の喫煙率は、いまの五十五パーセントから、一〇年後には、四〇パーセント台まで低下するると書いてある。
「救いは、女性の喫煙率が増加するということか。」
「しかし、三〇代男性の喫煙率が六〇パーセント近くというのは驚きだな」

「そうですね。その年代は理性があるかと思っていましたが、数字では、そうなっていない。ストレスですかね。いずれ、そのあたりを調査をすれば、何か活路が見出せるかもしれません」
権藤は言った。
「いま、これだけ禁煙運動が活発化してきているのは、非喫煙者が大きな不満をいだいているからだ。あらゆる場所を分煙にすれば、その不満も解消できるだろう。そうすれば、喫煙は、個人の嗜好ということで、非喫煙者も納得してくれるはずだ」
「いずれ、品川君。これからのＮＴＳは、難しい舵取りが要求される。佐伯君と一緒にがんばってくれ」
「はい、権藤社長。ありがとうございます」
　佐伯は、思った。確かに、タバコの消費量はある程度確保できるかもしれない。しかし、それではジリ貧だ。やはり、ＮＴＳはタバコ以外の分野に進出すべきなのだろうか。
　品川は、佐伯からもらったシンクタンクの資料を抱えて、社長室を後にした。
佐伯は思った。やはり、権藤の人を見る目は確かだ。品川と議論していて、よく分かる。品川は、問題を正確に把握し、それをいかに解決すべきかを常に明確に意識している。社長として、これ以上の人材はいないであろう。
「社長、今夜は、民衆党の田中議員との懇談が入っています。それまで、時間がありますが、どうされますか」
「そうだな。空いた時間に、このシンクタンクの資料に目を通してみよう」
「そうですか。それでは、時間になったらお迎えに上がります」
そう言って、佐伯が部屋を出て行こうとすると、権藤が呼び止めた。
「この前は、休日なのに悪かったな」
「いえ、とんでもありません。こちらこそ、お世話になりました」
「ところで、佐伯君は小枝子のことをどう思った」
「はあ？」
「娘の小枝子のことだよ」
「はい、とても素敵なお嬢様と思いました」
「そうか」
そう言ったまま、権藤は黙った。佐伯は、権藤がどうして自分にそんなことを聞くのかが分からなかった。それ以上、権藤は何も言わなかった。佐伯は、社長室を出ると、経理部に向かった。亜美のことが気になっていたからだ。
　経理部のドアを開けると、いきなり、田辺亜美の姿が目に入った。佐伯にむかって手を振っている。佐伯は苦笑いした。しかし、まわりには迷惑をかけていないようだ。
　佐伯は、部長室に向かった。
「いや、これは佐伯室長、ようこそおいでくださいました」
経理部長は佐伯の二年後輩である。

「私が紹介した新人がどうしてるかと思って、寄らせていただきました」
「ああ、田辺さんの件ですね。本当にいい人を紹介していただいたと、みな大喜びです」
「そうですか」
お世辞かもしれないが、佐伯はうれしくなった。
「亜美ちゃん。あ、ごめんなさい。もう、みんなで苗字ではなく、名前で呼んでいるものですから」
「いえ、かまいませんよ。私も亜美ちゃんと呼んでますから」
「彼女は何しろ明るいところがいいですね。それから、妊娠の件なのですが、最初は少し心配していたのですが、杞憂だったようです。古巣の女性職員は、いろいろと亜美ちゃんに教えてくれるし、若い女性たちも、亜美ちゃんのことを気遣っています。それが、部内をまとめるのに大いに役にたっていようです」
「そうですか」
「それに、彼女、数字に強いんですよ。わが部は、これから忙しくなりますからね。去年なんかは、最後は険悪なムードでしたけど、今年は、亜美ちゃんのおかげで、無事乗り切れそうです」
「それは良かった」
「子供を生むために、亜美ちゃんは五月から休みに入りますが、ぜひ、わが部としては、帰ってきて欲しいですね」
佐伯は、本当かと驚いた。
「それは、正社員として採用していただけるということですか」
「それは、こちらからお願いしたいくらいです。社長室長が、応援してくれれば問題なく決まると思いますよ」
　佐伯は思った。この話を亜美ちゃんはどう思うだろうか。何しろ、彼女の目標はミュージシャンである。正式な社員となれば、その夢を断念しなければならない。
　実は、佐伯が次期常務候補ということは、幹部社員の間では知れ渡っている。やっかむものもいるが、多くのものは、歓迎してくれている。経理部長が、佐伯が応援すれば、田辺亜美の正式採用もすんなり決まるといったのは、この人事を睨んでのことである。
　部長室を出ると、佐伯は亜美に声をかけた。
「亜美ちゃん、ちょっといいかな」
亜美は、まわりに席をはずしてもいいかと聞いている。
「いいわよ。今日は、そんなに忙しくないから、佐伯室長の相手をしてあげて」
と古参の女性社員が言ってくれた。
　応接用のブースにいくと、亜美は
「佐伯さん。本当にありがとうございます。仕事がこんなに楽しいものだとは思いませんでした」
「そうか、それは良かった。良治君はどうしてる？」

「彼も、喜んでいます。わたしがいなくなったので、バンドの曲風は変えなくちゃいけないと言ってましたけど」
「そうか」
「でも、アルバイトでも、こんなに給料がいいなんて、とても感謝しています。前のスーパーのレジの時の二倍も頂いて、良治とふたりで驚いています」
「まあ、亜美ちゃんの場合には、資格もあるし、数字にも強いようだからね。経理部長も大喜びだったよ」
「そうですか。そう言って、もらえれば、私も嬉しいです」
「ところで、おなかの赤ちゃんはどう？」
「ええ、おかげさまで順調です。申し訳ありませんが、五月からは、この仕事ともお別れです」
「実は、その件で相談があるんだが、どうだろう」
「どんな話ですか？」
「経理部長は、産後に亜美ちゃんに社に戻って来て欲しいと言っている」
「えっ、それは、アルバイトとして、また雇っていただけるということですか？」
「いや、そうじゃない。正式な社員として採用したいと言っているんだ」
「わが社は、福利厚生がしっかりしている。若いお母さんのための託児所も完備している。通勤時間もフレックスにできる」
驚いたことに、亜美ちゃんが目に涙を浮かべている。
「亜美ちゃん。どうしたんだ。何か悪いことでも言ったかな」
「そんな。ありがたすぎて感謝してるんです。こんな私をそこまで評価してくれているなんて」
「だけど、亜美ちゃんの夢はミュージシャンになることだったよね。ＮＴＳに務めてしまったら、その夢が実現しないことになる」
すると、亜美ちゃんは意外なことを言った。
「この子を産むと決めた時から、ミュージシャンはあきらめていました。もし、正社員として採用してくれるなら、そんな有り難い話はありません」
「そうか。部長も喜ぶと思うよ」
　亜美は立ち上がると、佐伯に頭を下げた。
「亜美ちゃん。感謝の言葉なら、経理部長に言ってくれ」
そういうと、亜美ちゃんは
「聞きました。佐伯さんは、ものすごく偉くなるんでしょう」
「そんなことはないよ」
佐伯はしみじみ思った。人の縁など分からないものだ。あの大黒屋での出会いから、思わぬ人材を採用できることになった。